

2016年度 第2回首都圏地域コア運営委員会 報告書

1. 日時 2017年3月9日(木) 10:00~12:00
2. 場所 電気通信大学 東7号館 415号室
3. 出席者 11名(企業7名、自治体・産業団体2名、学内10名)
4. 議事

■スーパー連携大学院からの報告・意見交換

① スーパー連携大学院の現状と今後の方向性について

梶谷会長より、スーパー連携大学院の活動に関する文部科学省補助金が終了するが、今後もスーパー連携大学院の取り組みは続けていく旨の報告と、資料No.1に基づき現状と今後の方向性について説明があった。

② 事例発表 学生参画型産学官共同研究：電気通信大学+TIS株式会社

中島氏より TIS 株式会社との共同研究による学位研究について発表があった(以下概要)。

- スーパー連携大学院プログラムの共同研究の位置づけ
- 共同研究実施のメリットと、成功のための要因「共通領域を探すのではなく、構造が同じである課題を探して、最先端研究成果を産業課題に応用すべき」
- TIS 社との共同研究事例の中での成功要因「博士学生が研究チームの主体となり、企業側、教員側の両方のアドバイスをバランスよく実施する」
- 自身のキャリア形成への影響「企業に一度就職し、企業内の企業支援制度等を利用したスピナウトを目標としている」

③ スーパー連携大学院受講生の研究テーマ紹介

電気通信大学に所属する修士1年生の下記の研究テーマについての紹介があった。

- 人間がコンピュータの何を「人間らしさ」として評価するかについての研究(仮)
- ユビキタス三次元位置計測法 UbiC3D における位置同定の高速化
- 自動車運転免許取得者の歩行者交通心理を利用した交通安全教育教材についての研究(仮)

④ スーパー連携大学院：将来構想検討WG 検討内容について

■電気通信大学からの報告

⑤ UEC アライアンスセンターについて

⑥ データアントレプレナープログラムについて

5. 意見交換

- スーパー連携大学院の構想を、どれくらい企業が理解しているだろうか。企業側の理解度が足りていないのではないかと。共同研究のテーマも、大学の先生から、産業界に必要なテーマを出せと言っても難しい。5年先、10年先の社会を予想して、テーマを発掘しなければならない。それに向かって人を作っていかなければならない。
→ 企業側への認知度を上げていくことと同時に、学生への認知度も上げていきたい。
- 学生が本当に主体となっている点、これまで実施されてきた共同研究との大きな違いである。素晴らし

いスキームだが、学生が主体になることの唯一の欠点はパワーである。一人でできる仕事量は少ない。

- 素晴らしいスキームだが、中島氏が優秀だったため実現したものである。中島氏は非常にバランスが良い調整力、コミュニケーション力があつた。学生を育てるためには、スーパー連携大学院の仕組みを活用して、今後もこのようなスキームが成立するように学生レベルの底上げする制度がほしい。
- 中島氏の成長には、TIS社の力が大きかったのではないかと。中島氏が活躍する環境を、上手く整えることができていたのではないかと。中島氏自身、TIS社と協力したことの影響はどう考えているだろうか。
 - 大学にいと分からない企業側の問題について、研究現場の意見や顧客、政府機関の意向をTIS社へのヒアリングを通じて知ることができたことが良かったと考えている。
 - そのヒアリング相手は現場の担当者だろうか。直接担当者とは相談できたことが良かったのではないかと。
 - 担当者が、共同研究について主体的に色々考えてくれたことが良かった。チームとしてのまとまりがあり、チーム力のメリットを活かすことができた。
- 各地域での社会人教育が大きな課題となっており、このプログラムについても引き続き実施と連携の検討をしていきたい。



梶谷会長の発表の様子



中島氏の発表の様子